

KOBUNSHA BUNKO

長編企業小説

重役室

清水一行



長編企業小説

重役室

著者 清水 一 行

昭和62年12月20日 初版1刷発行

発行者	大坪昌夫
印刷	凸版印刷
製本	凸版印刷

発行所 株式会社 光文社

〒112 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03(942)2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Ikko Shimizu 1987

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70655-X Printed in Japan

光文社文庫

長編企業小説

重 役 室

清水一行



光 文 社

目次

八章	七章	六章	五章	四章	三章	二章	一章
披	撤	実	謀	孤	思	急	水
露	収	力	盟	立	惑	変	杯

解説

厚あつ
田た
昌まさ
範のり

354 320 273 231 189 142 100 46 5

一章 水杯

「雪でも降るんだろうかね……」

つぶやきながら、品川の工場から帰り着いたばかりの浅井八郎は、役員室の入口にある秘書課へはいると、無造作に窓際まで歩いて、激しく流れる無気味な黒い雲を覗き上げた。低い雲のせいで、刺し込むような冷気が執拗に足首にからまる。

「常務はいま、表から戻られたばかりではございせんか」

改めて雲の流れを気にする必要があるまいと言いたげに、神経質そうな細面の、天野啓一秘書課長が、首をすくめて笑った。

「車に乗っていると、あまり気がつかないからね」

「四常務はお揃いになっておられます。もつとも専務のお帰りは午後六時ごろになるという連絡がございましたが……」

「じゃ、その後になるか」

「シルバー・エースの件、ということになっておりますが、議題は格別」

わかつていとうなずいた浅井は、すぐには秘書室を出ず、書類のとじ込みをしていた川添則子かわぞえのそばに椅子を引いた。

「広川君は」

「はあ、社長室です」

白い歯を光らせたぎごちない微笑で、女性秘書課員の川添則子が答えた。

「すると、社長の正月スケジュールの打ち合わせか」

「よくわかりません。お茶でもおいれたしましょうか」

警戒気味に腰を浮かしかけた若い川添を制止し、

「そんなことよりも、君たちはどうするの」

と、浅井が聞いた。

「あの……、なにがでしようか」

「スキー、それとも旅行？」

「あ、お正月ですか。経理部や営業部では、スキーに行くのだそうですが」

「秘書課は」

「べつにございません」

「なんだ、それはいかんね。若い女性が、せっかくの正月、餅もちを食べて寝て暮らすなんて、二キビが出ちゃうぜ」

その浅井の言い方に、川添は向かいあわせた岸本良子と顔を見合わせ、首をすくめて笑った。
「彼氏とどこかへ行ったらいいじゃないか」

「そんな人、いません」

「どうして」

「あら、おかしいですか」

「わが親愛なる女性秘書課員が、そんなにもてないとは思えないがね」

「あの、お茶を……」

「いいからすわっていなさい」

当惑して立ちかけた川添則子の手を握るようにして、浅井は強引にすわらせた。川添が、思わず体を固く身構える。

用もないのに、やたらに秘書室へはいり込み、二人の女性秘書課員に、意味のない軽口を浴びせかけるのは、浅井の癖だった。その後、立ち際には決まって相手の肩に手を置き、女としての成熟度でも確かめるように、無遠慮に肩を握り込み、

「天野君や、広川君に口説かれるなよ。中年男は上手だからな」

と、笑いながら言い捨てて役員室へ戻ってゆく。

身構えた川添則子の警戒はそのためだったが、そのとき正田社長との打ち合わせを終えた社長専属秘書の広川正義が、せわしげに社長室から出てきた。

「浅井常務、そろそろお集まり願います」

「しかし、中山専務、まだらしいよ」

浅井が言うと、天野が後を引き取った。

「そう。午後六時帰社という連絡だったから」

「じゃまだ十五分ぐらいある」

「どうしよう。常務室へ知らせておこうか」

「そうですね」

腕の時計を見ながら広川がうなずいた。

入社歴で六年以上も差のある天野は、共立自動車きりゅうじどうしゃの社内年功からいっても、また、秘書課長という職制上からも、当然広川の上司に当たっていた。だが、広川は天野のそういう立場を、格別斟酌けんしやくはしない。それは共立自動車の最高首脳である社長の行動いっさいを掌握しているという、専属秘書の尊大さであった。

天野がもし広川に、秘書課の管理権を振りかざして接しようものなら、広川はたちまち天野に背を向けかねなかった。その場合、不利な情況に追い詰められるのは、上司であるはずの、課長の天野であった。

そこで天野は広川にたいして、敬語こそ使わないが、同僚課長と話し合う時の姿勢で、接することになる。

「じゃ、十五分後ということで、連絡していただきましょうか」

室内の浅井を一瞥して言う広川の言葉に、天野は軽くうなずいて室を出た。同時に浅井が腰を上げる。

「広川君」

浅井は、秘書室からつづいた社長室のドアまで進み、ゆっくりと広川の方を振り向いた。

「それまで、時間いいかな」

「はあ、なにか……」

「うん。道家相談役から言われていることがあってね。ちょっと社長にご報告しておきたいんだ」

道家相談役と聞いて、広川が口をつぐんだ。

戦後の混乱期に、いち早くジーゼルエンジンによるバス、トラックの生産開始で、共立自動車を再建に導いた前・共立自動車社長道家弘之ひろゆきは、取締役兼相談役という代表権のない立場に祭り上げられてはいたが、なお社内の中堅幹部級以上に、隠然たる影響力を擁し、正田直彦なおひこ社長も、常に一目置く存在であった。

「じゃいいね」

言うと広川の返事も確かめず、浅井は社長室のドアをノックした。

「失礼いたします」

室にはいって一礼した浅井に、瘦身小柄で、縁なしの眼鏡めがねを掛けた正田が顔を上げた。

「中山専務の帰社は、午後六時の予定だと申しております。まだ十五分ほど」

「そう」

「その間、ちょっとよろしいでしょうか」

いいかと言いながら、浅井はすでに正田の机の前へ進んでいた。

「なにか……」

「いえ、格別」

椅子の背に体をそり返らせた正田は、机の煙草たばこをつまむ。素早く浅井が、ポケットのライターをつけ、正田の前へ差し出した。

「社長、年末年始はいかがなさいますか」

皺しわの多い浅井が、お追つ従しよ笑ういを泛うかべて聞いた。

「そう、明日、明後日は川奈かわなだ」

「三十一日に荻窪おぎくぼのお宅へ」

「元旦は家でせねばならんからな」

「ゴルフですか」

「すこし休養をせんとね」

「それは結構でございます。わたしにお伴ともをお命じいただけませんでしょうか」

「うん……」

「すでにどなたか」

「中山君が来るらしい」

「あ、専務が、さようですか。しかし社長、専務がお揃いでご休養をとられますのなら、身辺のご用を仰せつかる者がおられませんと……」

「いや、広川が来るだろう」

——女を連れてゆく気だな。

そうは思いながらも、微笑だけは崩さず、

「広川一人では、ご用が足りないと思います」

と、浅井はなおも食い下がった。

共立自動車の現主流は、正田社長——中山専務ラインである。同じ営業畑出身ということで、二人の結びつきはかなり古いものであった。

日本の大手自動車メーカーのなかで、共立自動車は最古の創業歴を誇っている。

といっても、自動車メーカーとして初めから単独創業をしたわけではなく、もとは明治の元勳大和田一栄が築いた共立築地造船所の、自動車部門としてであった。昭和四年、自動車部門は共立築地造船所から分離独立、当初共立築地自動車製作所を名乗った。このときの独立新会社は、取締役として参加した道家弘之が、終戦直後の社長を勤め、販売部長が現社長の正田直

彦、係長に中山善次ぜんじがいた。

同時に、この新会社独立に際し、前年入社した共立築地造船所のエリート社員五人が、将来の中堅幹部要員として、とくに選ばれて送り込まれた。

現、正田直彦社長体制下の共立自動車で、経営の要かなめになっていく気鋭五人の常務がそれで、営業担当常務東大法学部出の山部重臣やまべしげおみ、経理担当常務一橋出身三条幸晴さんじようゆきはる、技術研究担当常務東大工学部出の早田時雄はやたときお、総務担当常務京大経済学部出、重岡利雄しげおかとしお、それに製造技術担当常務の浅井八郎である。もっとも浅井八郎一人は大学出身ではなく、横浜高等工業出。そこで、五人の常務のなかでは、常に順位末席ということになっていた。

この五人は、課長昇進も同時なら、各部の次長へも同時に昇進した。そして戦後、道家社長時代に、同時に部長となり、昭和二十五年、共立自動車の戦後再建の功労者といわれた道家弘之社長が、折りからの労働争議処理の下手際で責せめを負い、社長を辞任、正田直彦社長登場と同時に、五人は揃って共立自動車取締役となり、三十二年、これもまた手を取り合って常務取締役に栄進した。

この間、共立築地自動車製作所は、昭和八年に国民自動車工業、昭和十二年に帝都自動車工業と名称を変えながら、当時の競争自動車メーカー三社を吸収し、規模を大きくしてきている。そして昭和十六年に、共立ジーゼル自動車工業と名称を変更、戦後共立自動車となった。

共立築地造船所から分離独立してからの、共立自動車がたどった終戦までの歴史は、軍需を

中心に、日本の軍国主義化と共に伸張してきた軍用主流の自動車の製造であった。このため終戦と同時に、会社は解体してしまうかにみえたが、新社長となった道家弘之が、ジーゼルエンジンの技術を活かして、軍需オンリーの生産会社から、バス、トラック中心の民需会社へと、大転換をはかり、これが見事に成功。戦前からの古い歴史と、戦後これまでの実績を背景に、自動車業界大手御三家の一角を、辛くも守りつづけてきていた。

この間、とくに道家弘之が突然の退陣を余儀なくされるまで、正田直彦が常に経営主流であったというわけではない。

道家社長体制があと五年もつづいていたら、正田直彦は共立自動車の副社長どまりで、次期社長は正田を飛びこえたもう一回り若手の、つまり中山善次専務のライバルだった横田好三郎専務にバトンタッチされるはずであった。だが、道家弘之は、彼自身の心づもりより五年早く、不測の労働争議処理のつまずきで、社長の座を明け渡さなければならなくなったのである。

正田直彦の幸運が、実はこのとき開けた。と同時に、正田の腹心を通してきた中山善次にとっても、それは降って湧いたような開運の契機となったことは言うまでもない。

ライバルの……というより、社の内外一致した評価として、共立自動車の次代を担うホープと目されていた横田好三郎が、正田体制からはみ出し、脱落していった。同じように共立築地造船所から分離独立以降の、いろいろな意味での競争相手を、中山は次々と払い落とし、気鋭の新進五常務を配下に、次期社長の座を確固不動のものとすることに、成功したからである。

だが、ここに至るまでの、中山善次の正田直彦にたいする忠勤ぶりは、単なる正田の絶対的な腹心、番頭といったもの以上の、下僕のごとき奉仕だったといえる。

正田直彦に賭け、一筋に打ち込んだ執念といってしまえばそれまでだったが、公私にわたるというより、とくに煩瑣で細心さを要求される、私的な面での奉仕が目立った。正田一族のすべてにわたって、中山は積極的に取り仕切っていたし、専務のいまでも、なお正田の女係おんながかりを誰にも譲ろうとしないくらいであった。

年末の仕事納めというその日の外出も、正田直彦の三人の女のうちの二人にたいする、お手当ての配達のためである。

五人の常務のうち、この正田―中山ラインに直結しているのが、営業担当の山部重臣。もともと二年ほど前までは、総務担当の重岡利雄が、正田―中山ラインの直系を自負していたものだが、中山を飛び越して、直接正田社長に、社内の情報や業界動向の御注進をするようになり、そのことが中山を刺激、中山に疎んじられると同時に、いつのまにか、主流ラインから外されてしまっていた。

中山の正田にたいする関係と同じ意味で、浅井八郎が社内情報や業界動向の御注進をする相手は、相談役に退いた道家弘之。

そんなことから浅井は、五人の常務が机を並べた常務室で、道家派と目され、正田社長や中山専務からもそう見られていたが、浅井にとって、それは決して本意ではなかった。現状で、

正田―中山間のスムーズな政権授受は確實だし、その場合、次のバトンタッチは現在の五常務のうちの、最も中山に近い者に行なわれる。それは絶対といっていい既定のコースだった。

勝負は、正田社長の、残り在任期間中ということになる。この間に、正田―中山ラインの直系と呼ばれる位置に食い込まなければならなかった。

「なにか趣向でもあるのか」

正田直彦社長が、ずり落ちた眼鏡をこじ上げようともせず、物憂げに煙を吐きながら聞いた。たちまち皺の多い浅井の表情がゆるんだ。

「ございます。明二十九日は川奈へご一泊いただきまして、翌三十日、目と鼻の先、伊東へ立ち回りましただけですれば」

「伊東へ……ね」

「は、ご存知かと思いますが、その手の娯楽では、伊豆半島のなかで、伊東が一番でございます。なにしろ役者も揃っておりますし、女共も……」

「女、か」

「鮮度のいい素人から、かなりの技巧派まで、あそこなら十分に集められるはずでございます。わたくし明日伊東へ参りまして、社長、専務とも、十分にご休養がとれますよう、準備いたしますが」